
貴方が私に甘いお仕置きを

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方が私に甘いお仕置きを

【Nコード】

N8536C

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

『写真の貴方へ捧げる愛を』と『貴方が私に送る愛の言葉』の続きになります。名づけて俺様シリーズ？ちょっと微妙な話になったかもしれません。

誰よりも

貴方を愛しています

シンとした教室に私はいた。

両手に重いカメラを握り締めて、貴方を見つめている。

この時間が好き。

この時間が幸せ。

だって、貴方が見えるから。

「あ、一年生がゴールした」

今年入ったばかりの初々しい一年生がゴールを入れて大喜びをしている。

その可愛い笑顔に思わずシャッターを切る。

「よかったね」

あの人と付き合い始めて、この日、私は初めて他の人を撮った。

「あれ？」

この前撮った写真。

この日、やっと現像して、ある場所に置いていた。

それなのに、何故かその写真がない。

少し目を離した隙に。

疑問に思って首をひねる。

「探してるのは、これ？」

いつの間に背後にいたのはあの人。

びっくりして小さく悲鳴を上げる。

情けない声を上げてしまったことが恥ずかしくて顔を赤くする。

彼はヒラヒラと数枚の写真を手にとって揺らして見せた。

「あ、うん」

何だか怖かった。

いつもと違う、いつもより低いその声。

固くて、表情のない顔。

怒ってる？

どうして？

「珍しいよね？」

「え？」

沈黙を破ったのは彼の方。

一枚の写真をそこから抜き取って私に見せる。

それは思わず撮ってしまった一年生の写真。

「それ、が？」

「俺以外の奴撮るなんて珍しいよな？」

もしかして？

まさか……………？

これが怒っている理由？

「どうして撮ったの？」

「え？つい、喜んでる顔が可愛くて」

雰囲気のにまれて私は本当のことを口走ってしまつ。

さらに彼の顔は険しくなる。

彼はゆっくりと私に歩み寄る。

怖くて、思わず後ろに下がるけど、机があつて、すぐに距離を縮められてしまった。

「ふうん、だから撮ったんだ」

冷たい声音に身をすくめてしまう。

彼は私の手を取って引き寄せる。

まるで、逃がさないと言われているようだった。

「でも、俺はちょっと納得できないから……お仕置き」

そんな理不尽なことを呟いた瞬間、私の身体は拘束される。

強く抱きしめられて、心臓が飛び出しそうなくらいうるさくなる。

触れている場所が熱くて、気付かれそうで怖くて。

おそらく今の私は顔を真っ赤にしているだろう。

お仕置き、とは一体どんなことなんか、今の私にはそんなこと考えている余裕はなくて。

ただ、この熱さと心臓の音に気付かれないようにと願うことしかできなかった。

「すごい、ドキドキしてる」

気付かれたと、顔が熱くなるのがわかった。

そしたらすぐに身体を離されて顔を覗かれる。

「熱いけど、感じてる？」

「な、な、何言って……………っっ!!」

突然唇をふさがれて思考が停止する。

差し込まれるものに苦しさで熱を感じる。

いつのまにか彼の服を強く握って、他の部分は力が抜けていく。

長い、長いキスは私が吐き出した息によって終わりを告げる。

「こんなんじゃない、今日は終わらせない」

「え!？」

彼のお仕置き。

それは私を窒息死させることみたい。

「ん……………」

目を開ければそこには心配そうに私を覗き込む彼の顔。

びっくりして起き上がると、彼はほっと安堵したように顔をほころばした。

「おいおい、キスぐらいで気絶しないでくれよ」

「え？だって、あんな……………」

どうやら私は気絶していたようだ。

思わず顔を真っ赤にして、私は視線をそらす。

その反応が面白かったのか、彼は笑い声を上げる。

「い、意地悪！！大体、何でこんなこと」

「それはお前が悪いんだぞ？こんな写真撮るから」

「……………やっぱり妬いてるの？」

「なっ！！」

私の言葉に今度は彼が顔を赤くする。

その顔が可愛くて、つい私は顔を緩ませてしまった。

そうしたら、彼はむっと顔を苦くした。

「何笑ってんだよ」

「だって、珍しいものが見れたから」

いつも俺様で自信満々の彼が、たった一枚の写真で取り乱すなんて、なかなかないもの。

私のことを想って怒る貴方が、好き。

可愛い…。

「今、可愛いつて思っただろ？」

「へ？何でわかったの！？」

予想通りだったのが嫌だったのか、口を引きつらせる彼。

だけど、すぐに表情は笑みに変わる。

意地の悪いその笑みはいつもの俺様の彼。

「俺よりもお前の方が可愛いのに」

「へ？え？」

「だから、俺が惚れるんだよ」

いつも、彼には適わない。

一緒にいるだけでこんなにもドキドキなのに、そんなことを言われると正直困る。

赤くなった顔を隠すように私はうずくまる。

「もう、そんなこと言ったら私がどうなるか知ってるくせに」

「知ってるから言ってたんだよ。誰のことも目に入らないくらいに俺に惚れてくれないと困るんだよ」

どうしよう。

どうしよう。

私の熱は冷めることなく増えていく。

甘い甘い口づけと言葉と共に。

「次から、絶対俺だけを見させてやる」

「もう、ちよつと独占欲強すぎない？」

「それが俺だろ？嫌いか？」

ずるい。

そんなこと聞かなくてもわかってるくせに。

だって、先に好きになったのは私だから。

貴方を愛しています。

「嫌いになんてなれないよ」

「ナイス。それで今日のお仕置き終わりにしてやるよ」

意地悪で、

意地っ張りで、

独占欲強くて、

だけど、

それだから、

貴方が好きなの。

「じゃあ、ちゃんとしたキスをして？」

「上等、また気絶するくらいのキスをやるよ」

そして、私はまた一つ。

戻れない関係に溺れていく。

（後書き）

えっと、すみません。何か、すみません。思ったよりも文章が出なくて、微妙な話になってしまいました。

俺様君、いかがだったでしょうか？できれば感想評価下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536c/>

貴方が私に甘いお仕置きを

2010年12月26日04時13分発行